

助が、ひげも涙をながしけり、重て奉行の仰には、ふびんなれどもせひもなし、法にまかせおこなへと、火ざいの帳にとめられて、日本橋にてお七をばさらしける、只世のあはれは是なりと、うやまつて申。

○下、戀のひざくら歌さい

うやまつて申奉るのほ、さればちくるゐ、つばさまで、おやこのわかれかなしめば、いはんや人のおやとして、なげくことこそ道理也、八百屋お七のおやたちは、けふぞきはまるさいごびと、きくにかなしくきも玉しひも、せきくる涙もろともに、さいご所へかけ来り、其まゝお七にいただきつき、なくより外のことぞなき、母は涙の下よりも、さ程吉三にそいたくば、母にひそかにしらせなば、何とぞ和尙に申請、めでたふ祝儀をとゝのへて、なじみをかさねそはせふに、かゝるうきめを見すること、子にてはあらでかたきかや、若木の花をさきに立、跡に残りて何とせん、ともにきへよとなきければ、お七涙の下

よりも、なげかせ玉ふもことはりや、死のゑんむりやうと何ごとも、思ひあきらめ玉ひつゝ、なき跡とふてたび玉へ、おや子は一世ときゝければ、是がこの世の見おさめと、わかれをしむあはれさよ、かかる所へ吉三郎、ぐんじゆの中をおしわけてすがりつけば、コハいかに、サテなつかしの吉三様、命は秋のしもとかや、かくはあらねど妻ゆゑに、命をすつるならひあり、さいごの御目にかゝる事、つきせぬゑんとうれしやな、我をふびんとおぼすなら、出家となつてなきあとを、とふて玉はれ吉三様、此世のゑんはうすくとも、ながき來世でそひまする、もはやうき世のかぎりちや、爰へござんせ我つまと、たがひに手をば取かはし、此うつくしきお姿に、何の命がおしからん、かなしきこともさいごをも、つまにまよふてわすれたる、女心ぞいとほしき、時刻みつればそれゝと、おや子吉三を引わけて、お七ひとりに柴をつみ、ほのほさかんにもへあがる、あはれなる

かなお七こそ、十六歳を一ごとし、無常のけぶり是ぞ此、ぼんなふすなはちそくばだい、まよひもはれて吉三郎、すぐに姿をすみぞめの、かねにつれだつてもね佛、誠にはかなき戀路ぞと、うやまつてもうす。

○彦惣近江八景歌さい

見わたせば、何し近江の浦山は、八つのびけいの名所かな、よはほのゝとあさぎりに、立旅人はいせ参り、ふかきおもひは乗かけ馬に、くつわのおとはちりりんゝ、ちりりんゝ、りんゝゝりゝしきまごの歌、茶しやくの竹の一ふしを、所望々々のぞまれて、とうざいゝゝ、こゑは出すとうたふてみましよ、あしげ馬、追て浮世がなるか、えて袂のかけの馬、くつわのおとはちりりんゝ、りんゝゝりゝしきまごの歌、あはづの町の朝あけの、しづがわらやの戸をひらき、見世をおうせばいへゝゝに、ヨイヤサつたるものは何々、はながみわらんす口んぶりぞゝゝ、わらのざうりにすげの笠、近江の笠はな

りがよふてきよて、しめをがながしみじかしよわたりに、ましばかたげてしづのをが、家を出れば跡よりも、つまの女ぼうはおくり出す、はや出させ玉ふかや、けふはあらしもはげしきに、あきないものねをつめて、かをふといはゞやすくとも、そこをいとはで賣玉ひ、早うもどりてゆるゝと、やすみ玉へやこちのとゝ、やいのゝと申けり、彦惣すこしはなよ竹の、ふしぎなことはけさのなが、きつうおもふてもちにくい、柴がなま木が但しまた、けさの出立のにごり酒、たらぬかげんで有そふな、酒のかんして今壹つ、かさねゝの出立酒、あこぎが浦のあみだ佛、おがむゝと申けり、つたへきゝにしもろこしの、かの七けんといふは、琴詩酒をたのしめり、しづ山がつのわれゝは、ことひく事も歌も詩も、しらでくらせど今一つ、茶碗酒をば引ことは、じねんたねんに覺たり、とかく浮世は何よりも、色と酒とでかためたり、ほんに誠にわすれたり、色とい

ふのできがついた、おれがるすには女房共、わか  
男をよせ太鼓、うてばひびくぞ何事も、我はしらね  
ど人がいふ、秋風ならばどう成と、そこも談合の有  
そ海、山田やばせのわたし船、のりかへたくばハッ  
まよ、三くだりかいて半くだり、さらり〜とい  
とまの状、ふるすにかへるいへづとに、ほかをかせ  
げと申しけり、女房大にはらをたち、いつものくせ  
といひながら、となり近所をはち玉へ、いつマアるす  
に人をよせ、ふぎがありとは誰がいふぞ、それはこ  
ちからいふ詞、女房たらしして内を出て、柴はうら  
で色ぐるひ、大津の町の色里へ、かよひ局の女郎と、  
たがいちがひのお手枕、ほんにおかしいことじや迄、  
よし人がわらふてアノ里を柴屋町じやと名に立る、そ  
なたのかやる女郎の名をば、つま木と申げな、それ  
がうそにてはら立ば、三くだり半は扱おきぬ、九く  
だりも十くだりも、それはこちらからかいてやる、は  
やうでていにや、すつきりもどりやんな、内へはよ

せぬとわめきける、さすがの彦惣あきれはて、いか  
に入むこなればとて、女房にさられ其うへに、十く  
だり半のいとま状、男が取て出ること、神武天皇こ  
のかた、つゐにきいたることはなし、まよふたりま  
よふたり、思ひ切つたるゑんのつな、さらばといふ  
て出ければ、女房やがてすがり付、シテとよはどうで  
もいにやるかや、チ、テヤ何のいなぞぞや、うそじや  
わいのこらへてと、袖にすがり付、おもふあまりの小  
いさかい、きげん直して出玉へ、諸事あきないはあ  
さゑびす、笑て彦惣は出にけり、そこで彦惣が立行  
ふりは、あたまちやせん、ふともとゆひで、はでな  
いしやうのはぎをばからげ、しやんとみじかい袖な  
し羽おり、戀となさけとふたつになふた、手づなお  
びしてましばをかたげ、彦惣はどこへしばをりうり  
に〜、ちんやじやかうはもたねども、にほふてく  
るはたきもの、柴めせ〜、彦惣が柴は、つま木に  
花を折そへて、まだもござんすはおぎはぎす〜き、

たばねながらもなふたふりは、コレ柴賣と見ゆるか  
の、オ、テヤおもにおろしてちと又やすめ、肩かよヨカ  
ロくいりにくいかたをく〜り、く〜り〜ておもし  
ろや、ゆん手はえいざん、めてはせた、むかふは草  
津まへはせ〜、こゝは所も名にき〜し、あはづのせ  
いらんこれとかや。

○嵐形見送り 五人兄弟

あらし涙の下よりも、野にも山にもほしきは子供兄  
弟也、しんはなきよりと、せはにいふもことわりぞ  
や、我此度都にのぼり、しよ見物のめをおどろかさ  
んと、思ひさだめ候へども、おもきやまふにうきし  
づみ、ながらえんことかたし、ひとりにはは〜、ひと  
りは子、女はごせのとも千鳥、我もしはてなばなげ  
きをやめ、は〜のくやみをいさめてたべ、扱喜代三  
郎はわかれば、ゆくとし月のおぼつかなし、かれ  
らがことをも、ひとへにたのみ申ぞかし、いかに喜  
代三、とてもものことにふる里なにはへ書置し、または

かたみのしな〜をも、おくり申さん、もつともと、  
れうし硯をとりよせて、せうじをひらき筆をとり、  
硯の海にする墨も、涙ぞおちてこきうすき、筆のあ  
ゆみぞあはれなる、一筆かいてともすれば、松がこ  
とのみか〜れたり、扱其次のすさみには、母、新左  
衛門の御事、扱其外はいづれもおなじぶんしやうに  
て、とりわき此身のうれしさは、は〜うへにあひ奉  
り、ち〜きやうやうの諸げいのみち、大龍寺中のつ  
ちにかばねはうづむとも、名をばうづまじ、なむあみ  
だぶつ、五つや三つの時よりも、三十餘年の春秋の、  
ねがひむなしくなれごろも、ゆるし玉へとふでをと  
め、元祿十四年霜月のかほみせごろのそらさむき、夜  
やしらぶるとつげわたる、嵐三右衛門判と書と〜め、  
筆をすて〜ぞなきいたる、なをしもかたみぞあはれ  
なる、はだの守は母方へ、わきざし小づかは勘右殿、  
かづらかみしも四郎五郎へ、ぶたいいしやうふたな  
がれ、勘四郎喜代三にとらするなり、びんのかみは女

共、夜半のさゝめにたきしめし、とめ木のかをりうすくとも、むじやうのけぶりなびきあふ、二世のちぎりとおもふべし、はぶたい二ひき、もみ二ひき、わたのしろまでそへられ、坂田殿より玉はりしを、くるわにのこすおもひぐさ、きやくにせかれてしのびあふ、おんをあだにてぼうしんの、念佛せよとの形見なり、手づま人形まひあふぎ、大夫のかぶろがほしがりし、思ひ出せし折ふしは、此人形も袖しぼる、露のそこにもふくあらし、なきがらとふてえさすべし、かの文藏の物語、ややまたなき身のふりと、めいどにまします親あらし、つたへおかれしさぐあがら、五郎までにとらせてくれ、まき繪のめん箱、名左衛門、つぎじやみせんは中川の、輿惣に思はぬ中なれば、かたみとなげくなげづきん、尺八つゝみふえたいこ、はやしかたのたれくへ、松は涙にくれるとも、だんじり打てはやしたて、形見とおもひ見せてくれと、くどきなげきておはしける。

△嵐喜代三親三左衛門死去、元禄十

四年霜月。

○傾國諸天づくし甲賀三郎

そもく此人間せかいの色にまよひ、しやくせんをするやからあり、四方に戀のよねをならべ、四つにわかつてうきふしの、づつうをはらすひぎのうへ、あさに夕ににぎはしき、新町と名づけしは、まづ東方にはあぶらみせ、白銀山かとうたがはれ、南方にはちご町、へのじなりにならばれたり、西方には九軒町、わうごん位をたて玉ふ、北方にはあはざ町、すいなるまぶの小宿あり、さておうようなる大臣には、是きげんとる太鼓もち、とりたいもらひたいと、しやうごんなる身のたづき、うきやつらきは二日ゑひ、只何事も世の中は、心にまかせかね次第、雲のうへまでのぼりつめ、ゆづりの家も色でうしなひ、あじきなき世と墨染の、またみきさせすのぼせつ、ふつゝあらば、おのが身より出せる身の、おちめたのみしかわるやりばなし、ひさらびゝしききやく衆でも、

とれぬとみると其むごさ、よもに浮名はいとわねど、むくひのほどもおそろしく、あゝ人めもはぢもゑりにつく、色にまよはすしかけもの、あるひはかのこりんするりもやう、今おりとう物身にまよふ、これみなすがたのたねなれや、かうしよくじんな人心、いとすいしさいさぎよく、さつゝとあめのふる夜はしめやかに、戀路のまくらうちとけて、風をひいたも、うつりじやとおんせいわざとせかくと、ごしきをくまどるねやのうち、玉のうてなも下に見ゆ、たはけつくすも一すゐの、うつるつまどのよるのあめ、むしやうめつたにしこなしがほも、にくてらし、ふりかけみればとりみだし、はやあさごみのあかつきも、わかれに心せはしなく、こんがうかたしにわらざうり、むねとらるかすうちのしゆび、只身のつねのむふんべつ、しきかいのほうづがない、すへて梅をば天神、ことには松のぼんでん、太夫しよく、あらゆる女郎にいたるまでぐちもんまいの心

にて、などかはこゝにすまるべき、たとひ一たんのゑんにひかれ、わるじやれどんなるきやくに行とも、手まりののぼることくにて、ひふッみよろづに心をつくるよね、矢よりも早くうけだされ、もとの心を引かへし、おくさまがたの心にいたれと、きせるをもつて、はたとうつ、牀とつてはだとはだ、せめかけく笑ひける。

○浮男揃おとこぞろ

すがたぞ色所なる。とはしらすして女郎衆、すあしきよげに立出て、あげやくに出らるゝ、よねたち見るやうつけ立、たいこひきよせむりおさへ、まづさきそめし花山さま、つぼみがちなるふうぞくに、ちがほ櫻の色をへて、ふかま橋二つもん、けふの御つとめのおきやくには、たれ、さん候、あの客、げに松葉のしげ様とて、あにごはあれどとをりもの、かまはぬことは戀がもと、御きりやうはすぐれねど、北濱中のねづよにて、はたもしらるゝつめもする、

あたりがようて手取もの、牀でのたつしや殊にはまた、ごしゆをまゐるもこゝちよし、お心いれはたいきにて、あゝおくゆかしとほめにけり、太夫げに誠、太夫にはそのくらゐのみおよくして、まなこのみかへしいたづらに、まじりあがつてしやんとして、松にそなわるうまれつき、そしる方なきよねなれど、つとめながらも身のくせに、よくがふかふてにくてらし、扱其頃はみちとせの、こきくれなるのもやうぞめ、むすびとゆめしあらをのこ、ぬれてみだれしみだれがみ、とのごだいたる枕あと、手をまはさるゝきやくがある、いたいめしたが右のもゝ、さきにつとむる客はいかに、さればいな、あのきやくはつしまの國のおさぶらい、とよらの源様御城下にては、かくれなきびなんのほまれ、心はうつじん、しよはけはもちろん、もん日をかねしやさしおと、太夫かたり玉へば、大臣はばちなげすてゝながめやる、げに此君は聞なれし、當世の情しり、牀でもやばはふらぬ

よし、すいなよねとはきよしかど、ちといおふならざしきつき、すんとしたまでいやらしく、そらしてよねはたかゝらず、またひくかりし客までも、あさからぬこそ情なれ、戀は二品ありながら、むくつかな事は、いふよりさつとのみかけさはげよと、ふりみふらすみさだめなき、身はうきふしのぞめき町、よねをさかなにうつけ立、ほす酒のかん、すがひの肴、こなたはあゆすし、あなたは玉子に、扱又すこしひきゐ有、いかやいせゑびいかだに切、小のおこの大口に、ざしきは酒にひたしける、さもやいかにつとめとて、くだまくたいこきのどくや、これもかぐらがなきゆゑに、△たいこもちか  
ぐらのうはま小松のしげるすみよしの、たいこはならぬとけうじける、ありあふざしきどよめきて、はや夕ぐれの山のはも、ひときりやうづつつかめとて、十めんつくるどれ衆共、小づらのあかひおとこかな、爰へおこしと色ふかす、とくしたひもにしよじとめて、はでなもやうをみつが

さね、二つさしぐししどもなく、身は戀みちてはきがほに、身ぶりやさしくうつくしく、すがほきめよくつやてりて、男見るめのふたがはに、あいきやうあつてなづみあり、此世まれなるうまれつき、とふにおよばぬわが戀の、みよしの様と詞をかけ、あとをいはぬもはづかしや、いろといろとおもしろや、三日つゞけどくどからず、屋敷三箇所うちつけて、とかふの事はいわでゆく、水のをみに袖ぬらし、くらもたからもいづれさて、こゝぞまよひのながれま

○色茶屋月見今様拍木  
やつし

げにもこよひは、秋もひがんのそらくらく、二口やの茶屋にきやくもなし、大臣仰けるやうは、いかにかか乗きゝ玉へ、さればもあん小りんがいひしにも、あすはねてこよひはきやくとのみて見んいやなはしらすくせつもやせんと、△もあん小  
りんの狂歌口ずんばひの言のはも、こどろひ客にあめをねぶらすならひかや、

かのむりやりしかけときこえしも、此いや風をこかしてに、さんご一步のかねのいろ、かいまわらねば、こすいとひかるかげを見て、すいはうたてをひやしきり、きりのと白銀すまさねば、せつきゝのかきだしに、大事のかねをかけあつめ、もはやいやとはおもへども、えんにひかれてわれゝも、もとの心のかはらねば、よそのわかい衆もちやくちやと、詞みだれてさわぎ行、風がきかする尺八は、ふいてとほりしこだまかな、あちのこちのといろゝに、ききやうがく風呂あふぎ風呂、ちよや小しゆんもみだれあひ、涙もらふておのづから、むねはさわげと座なりしぞ、こゑをくらべてなげぶしの、むしんいをかひとよわく、くされふつゝきほゝす、そうならア八まんあぶらむし、口きく客のむらがりて、みなみのかたへとびゆけば、よえうらやまし、我もまたゐんつのあらば、色里に立かへるべきながめかな、かか乗ふたせにゝ、次第をとむるものすこく、び

んくとなるはしやみのおと、色にひかれてとびあ  
るくは、やばになりそでいとほしや、あほうをはな  
げとうたがはれ、いとむかしのおかしきに、おぼ  
へてをつてよぶこめろ、せめてわが名を夕月の、神  
のちかひにくもりなく、わが家にかへるしゆびもが  
な、なむ清水のくわんせおん、ひがなたがはせ玉は  
すば、二度こきやうへかへしてたべ、ねびくわんを  
んりきと、けんゑつはいて御きげん有、心のうちこ  
そおかしけれ。

○山衆うそ説もりひさ  
ちさくのまはきやつし

そもく山衆の心いれ、客のせなかにのりのこま、  
うはばれほんにうけん事、此世があよそのまゝに、  
とりもなをさすたぶらかす、としひねたるがかねだ  
か也、かばかりすごきお山ども、つくりしうそがあ  
らはれて、心のしんく身をせむる、三百六十六にち  
を手くたさまくかりましょと、つとめのならひあ  
だばれや、そらなきなみだながしては、せんかたな

さにふみをやる、もんびのつとめあてちがひ、ひと  
りねをする牀のうち、そもや此きやく一人と、三十  
ばん神くるしめて、いのりたてたるかひもなく、十  
月もあはで子をはらみ、あまたの客にみかざられ、  
そしらせ玉ふ御うはさくやめどかひのあらばこそ、  
ほむらかもへてはらがたつ、扱其次は戀衣、わがつ  
まならぬ人のつま、ないぎのうらみねたみのかほ、  
しゆつけをおとせしつとめのばち、てだいをこかし  
た旦那のそねみ、おもひまはせばおそろしく、くに  
はならねど、かたて風きる大臣などは、くるわく  
とはかたごまほど、まはりまはらばおのづから、か  
ひもありそのはま千鳥、これは又うはききの山、ほり  
のやしうにうちこんで、つとめそこくそはくくと、  
なにをするやらわけもなや、ちすじの心中またして  
も、戀路のやみにかきくれて、しのびねに行しの竹  
の、きみにすがりてなくばかり、つらしやくやめ  
んどうな、そも又何のあんぐわにて、大じのきやく

のめをくらし、しなれぬおやをしなしたり、せつ  
きとなれば心せき、行くる人にむしんいひ、五百夕  
ほどのしやくせんにこひつめられ、あまたのかけと  
り、夜に三ど、ひに三度、はやうすませとさいそく  
す、かさねてうはきをやめせん、せいもんびやく  
らいつとめつき、はておやきやうだいにばちあたら  
ん、ちへあるとてたのみにならず、うたがひなしに  
くだんせと、むりやうのうそをつきませで、またふ  
づくられうつじんは、此せいもんを誠とおもひ、五  
百夕ぼんとはすみしは、うれしかりける次第也。

○傾國十二段四季の段

かいてふみしてそこはかと、硯のうみのかぎりなく、  
かざりしくらゐたづぬるに、まづ一ばんに太夫しよ  
く、むめをやつしてうつくしや、しやう天じんのや  
さすがた、みな見もどりしあざやかさ、はでなさし  
ぐしはでなふう、ふさのみくしのたかしまだ、なか  
ばむすびのぬきぞろへ、あだなふてにこやかで、戀

風にあくしどけなさ、すそひろがりにつまたかく、  
一きはまつのふうぞくと、あげやあそびの色くわけ  
ん、どこもかもよき其ふせい、これぞまよひの戀の  
ふち、うじやううしよくのおすがたと、かゑりもう  
してながめやる、こなたにそふて秋の山、しげみの  
しかのかこひぎみ、ゑにしむすぶのあいらしさ、一  
座のさはい情ふく、かせでてうしやかゑぬらん、心  
をすく色ざけは、いもせしらがのゆるるまで、ち  
ぎりたへせずいくよかも、ふたつまくらにのべがみ  
を、しんきといひしねすがたに、なをよろづよのな  
ごりにて、よねがこよひのしかけにて、ふみまちわ  
びてかよふべし、かみなでつけてさらばゑと、いと  
ま申せば大じんは、なごりをしくもあすのよと、い  
ろがみだるくさくら茶や、よほとくぎすやどりけ  
ん、またのあふせとさくやくは、見どころおほき客  
衆かな、扱とをりすじあはざ町、ゑちごののべ野よ  
しはらや、ほのかに見ゆる小てんじん、かうしく

も色そへて、なさけあらはにまぶぐるひ、うたをあ  
いづにあふてくらし、つやりさしてはなんのかの、  
いとましくるものおもひ、しゆびもそしりもしの  
ぶまで、おやかたのきもわざくれて、おなじはちす  
にいたらんと、もらさぬ中のたのしみは、さながら  
戀のしほどきや、月女郎と影またおなじ品とかや、  
扱たそがれの身じまひに、ぬきもとゆひのかみかを  
る、ゑくぼにうそをうばはれて、うかれ男のしのび  
ちに、もの日のせはをたすかりて、たいこかぎりの  
つとめだけ、のちの世とてもいとぬは、とんと此  
身をかの人に、ふうじめすごきかみかけて、二世と  
かはらぬたのしみも、うつなおとこのしらんこと、十  
とせがうちのうさつゝさ、すいた男とすへこめて、  
しなでひとつのこけのむすまで、かはらぬちよをま  
つぞいな、さてこそわけのよしはらは、かはらぬ色  
のこいゝに、くらきつばねのうきすまひ、たつや  
よみせのうちばかり、かははくふんにぬり出る、つ

ぼねほのかにはぎかほる、のどかなきやくもありや  
なし、いつもたへせすゑりかはる、おなじ色とてけ  
いせいと、なにのみつれてまぶもあり、たいこうて  
くちわこめて、ばんくせいなぞめき人、よるの  
うちにもめせきがつきる、さへあるにやりばなし、濱  
のまさごのかすくくと、かのいづつ屋のとこいりを、  
こゝにうつしていろくの、おなじながれのほりゑ  
には、つきせぬ戀のくらやもあり、さかゆく色のひ  
さしきは、新町みなみでとめたり。

○心中道行呂州色

わが命日はゆきとまる、ところなりけりあだし世を、  
しばしもなげくおろかさよ、ついにゆく道とはかね  
てきしかど、きのふけふともこよひとも、おもは  
ざりつるしでの山、みねどもいと心うく、ちよの  
ためしとうゑおきし、めでたきみよの松しげみ、今  
のうきみのながめには、澤のはちすはありがたき、扱  
もさがなきうき世をも、こよひかぎりとおもふにぞ、

よろづ心のひかされて、八ゑのしほぢになくかりも、  
こゑなつかしくしたはるよ、これもまよひのそのひ  
とつ、ふたりつれだつみつせ川、ふかくぞたのむの  
りのみち、これよりあなたのととてもは、けちみや  
くひとつに花をりて、なまアみだ、なまみだ、なむ  
あみだ、たすけ玉へとくりすつる、たもとのつゆのか  
ずとりも、かぎりある身ぞあはれなる、人ひとさか  
り花に風、げにやくわんらくきわまりて、あいしや  
うおほきよの中や、みとせいせんのおつきやみ、て  
んじんざかのかへるさに、小さんか、るいか、たれ  
やらが、ほたるをとつてあそびなば、みちのひそく  
になるらんと、ゑいをすゝむるくさのべは、つきく  
まつしやかすおほく、世にもときめきたりけるが、  
けふのこよひのさいごには、たれとふものもあらし  
ふく、のちのくさばのした露と、きえなん事の口を  
しや、これが此世のみはてかと、たがひにかほをみ  
あはせて、しのび涙はあめやさめ、ぬれにぞぬれし

もろたもと、ひくてあまたの身にしとき、むりなく  
せつにしかられて、よたなげきしわが袖は、あし  
たほす日もありつるが、あさ日をまたぬかげうふに、  
命くらぶるあはれさよ、爰はめいとヘナ行みちなれ  
ば、筆にやことかく、すやりすみやもたす、もしもみ  
なさまナアおとをりならば、おや子三人うき世のゆめ  
を、見はてましたといふてたもれ、ふいの、うき世思  
ひあきらめわがつまと、すがりついたるちからぐさ、  
をぎのわか葉はつまべにを、させるがごとくうつく  
しと、思ひながらもいろかへて、ふちとこふちとふ  
たしなに、てふががよへばねたむらん、めだつばか  
りにつのぐめば、やよねたむかとおそろしく、しめ  
てねしよは有ながら、かはすまぐらの命よもすがら、  
しかもきこえぬさよめごと、まだつきなくにゆびを  
れば、わかれもちかし八ツのかね、ア、うらめしと思  
ひぐさ、しのお草なる戀草も、いづれか秋にあはで、  
さてはつべきのみか世の中や、小しゆん小かんに霜が

れて、しばしなき身と成けるも、またくるはるにめをいだし、かたふたふびかへらぬは、きしのひたいのねなしぐさ、われくおや子草かなと、うちしほれゆく、みちはひつじのあゆみひまもなく、あだしがのべにぞつきにける。

○三勝自然居士道行のやつし

こひのしがらみもつれつよれつ、いとでつないだ身でもなや、つないだ縁で、縁でつないだ身でもなや、わがつまなるをつまとせで、いやな所へ行くなれば、名のみのこせよ戀おとこ、とかくしねとのおしへかと、なに中村のうらざしき、なかばもろともさんかつは、あないはしりつうらみちより、しづかとはかり人やきく、そろりくとしのび出、千日寺と心ざし、おびしどけなく立出て、こよかしこよ、かほかにむけて、やみはあやなし夕より、ほしのかすよむあだしの、つゆふみわけてあゆめども、いついつよりもあしおもく、ひろひかねたるうたてさよ、

夜のふけぬるをたのしみに、道はかどらすあくせきと、おとはしばいにはしりつき、すかしてみればくろいぬが、ねすにはゆるはおそろしや、あなたこなたへはしり行、ごだうせぬ身は我ながら、しぬるとさらにおもはれず、あけなばさぞとおもへども、とてもなき身はきさんじと、心一つであきらめて、ゆけばうらみもあらし座の、やぐらだいこをながめつつ、役者々々、あけなばふたりがみのうへ、あらし岩井でたれく、杉山あづまと、西川あらしと、見てきたやうにしぐまん、こよかしこもかいどりこづま、ぞんぶりぞく、はまぶねぞんぶりぞくと、うつたる水のあは雪きへて、うき世に名をばながさん、我もなにはのおんなまひ、所によりてかさやとも、かはるものよなわれはまた、やまと口口といわれしに、かゝるうき身となりはて、國々しよくにあだ名をば、アノよばれんもくちをしや、おもへばこれもかねづまり、人やわらはん人やみん、わけ

てはづかし中村屋、ゆけばちそうのたねをまき、かたびら一つやることか、あげくのはてにきのどくを、かけてなかは露霜と、きへてかへらぬあだし世を、くやむはぐちとあゆみゆく、こぞはかしよのおちあひ口、夜なきする子のこゑきこへ、もはや夜あけの鳥もなく、なげくまいぞといさめしが、みるにつけきくにつけ、これが見おさめかかなしやな、またみることもあるまいに、せめてはかほをみせ玉へ、としごろ日比たくさんに、なさけがましきこともなく、いはで今まで戀衣、きぬのかとめてうつくしく、こゑおもしろさそがのまひ、よね衆みよとてな、すけなりすがれば、とらがなふりそで、さいこのくさ、やんれ、ふり出見たし、やんれ、其まひが見おさめか、ねざめのとこのおきわかれ、今見るやうにおもはる、きゆるをしらでさゝめごと、むかしがたりとなりけり、はやじんじやうのかねのこゑ、はやくさいごをいそがんと、ひやのうしろ

のたかそとば、こぞ一れんたくしやすと、つまとつまとをく、りあひ、かたみとなれやのこす筆、からすのくねほのくくと、夜あけのしもときへし身は、いづれなみだのたねぞかし。  
○かるた請狀けいせい請狀やつし  
もとよりきらいのあらばこそ、くわい中より時ならぬ、てくだしかけしがるた一めんとり出し、しらふだと名付、たかなしにこそきりあげけれ、すいほうどもまでこけ狀の事、一つ此かうと申すめ、ながれのしちをおかせせめ、うんすんぐわんねんまゑがうにむし、にぎりにあざもちやつきだし女郎、にくづしなどもさはりなく、せにも丸がち十はんまいて、銀子百匁はたしかに手どりの、身はかちぐりよ、おやはくさりのまんをとるとも、よひのあいだは一座のほかへ、ひとつかみでもせにはちらさじ、ひらひこたちにとつてやりても、そゑこにでられ、おと其まよ、つけめさせもが露ほども、とらるゝにじよ

いなく、てらをもうたずかたひざたて、まはすせにをば一もんも、手にもたせ申まじ、第一には見つぐるひ、うきなおいてうにいれじやうね、するすむし有てつけめ、そまつにいたすにおいては、きのままながらのむしにおろされ、または九けんのおたにせられて、かほに火をたきひあせながして、ひねれどく馬のぞろして、ちんばつけめのうんきちらにも、のこらずはらひ申べし、まん一此こうよことなり、まけてはにげてはしり井の、みづに身をすてまければたて、つかみな事をいふたりとも、五したはまけじ、いづかた迄も、うけてが出てさばきがみ、けなし四ぐるま、ぞろ上馬、一九二十にいたるまで、きはめのほかは、いちむちいわせぬさためなり、もしまたふかきよりのうち、九まいながらがいきもので、あざもそはりてあるならば、あたひ千ばん一ばんなりとも、それはうちてのとくぶんたるべし、もしたれ人ぞよみのばで、おか様たちの手をにぎり、手ま

めにせぐるあくしよぶね、おしてわるじやれするならば、一代かるたのおざしきへ、でる事かまひ玉ふべし、總じてはるの其内は、いやなりともよみうちならひ、かるたにがんをさしならひ、ちらまきなし手まきならひ、ねぶたくともいねぶらす、うちとむなくともよるくの、よなべにうたせ申べし、あはせしよもどり、しよてがうに、まけをおしませ申まじ、手みそくいぞん、くらもくゑぞん、申ぶん候まじ、其外かるたのよしあしにつき、後日の爲のかくじん奉公、まけ状のおもふき、くだんのごとしと、せにさし計をなげいだす。

○色酒三部經大曾我

これは扱置、うはきなるかなうつじんは、けいこくもんに入しかば、九けんのおげやにもうせんしかせ、おもてむきになほりいふやうは、さいはいなんびんが、九軒のかうしのうちにてつくさん事、ひとへに九こんの酒もりとおぼゆるなり、いかにしやくとり、よね

たちも、すこしさゆをばのますべし、それがしがさいかくに、女郎の三ぶきやうを、あらくとひてきかせ申さん、ヤアけもんしゆの人々も、なりをしづめて聞玉へ、それけいせい一代のやりくりはむづかし、ありがたきはみだよりも、太夫天神のくらゐ、三世のちぎりしゆつせの身うけは、酒きゆゑのらんのもとひなり、きやくにあらざるときんば、女ぼうれんの五字につとめり、いにつくときはなむあみだぶつで、ねござにあたゝまる、しゆびといつば、ふだんのいみやうわけのてんくののぶるやうな、わろはまの字をかながへて、くれがたにおふちやくす、ぐちなるも、さにいたつては、口上にほうまいす、一步をさゝぐる其時は、大じんよせんもこゝにあり、ゆびをさゝりもゝをつき、さしやうかく事ぶんめうなり、どうらく大臣の御しやくにいはいく、しゆぎやうとさんじたいみなたいさんをもつてさけとせり、おしるはみなないそんのしやうこなれば、本らいむふ

んべつ、おやじうなんぼくにゐんきよすべし、しからばありたけゐんつをあつめ、心のまゝにせん事は、きよごんさらになく、今でもあの字をやるべし、かまへてあいをつかさな、はうく京でもせの字をつくり、大じんとよばれて、はの字をやる、ほれたよねには手のじをつくして、ほんもうとげぬといふ事なし、十くわん三百匁、一さいわれらが八まんしよしや、うきやうかけてあいたいといふ時は、ちやうもんのよね立も、ひたいをゑりにおしつゝみ、わらはぬものこそなかりけれ、かのなんびんと申は、おさなかりける時よりも、しきだうにおこたらず、一心さんらんの月見は、むめうのゑいを出し、くわんらくのまぶのうちには、まゆに八じのしはをよせ、一日ちうやのさはぎは、む二む三の牀にさまよひ、一生ふらんにあそび、ひやうどう大事の事をわすれ、どうでも一天のほととぎすは、むさし野のそこになき、にうちうけんもんのうぐひすは、げこ上ごのきつに



さへづり、しよ客むしやうにたゞやる時は、せんしやうめつぼうのかねをつかひ、しやうめつめつゐの秋の月は、なつ八つにちらつく、ばんたんにふんべつし、かくのごとく有ものを、たゞ大ざけは御むようし、およぶもおよばざりけるも、みなくいけんを申ける。

此外前々よりひろめ申候、一色里なづみ草一冊、一色里びんが鳥一冊、一色里色すこもり一冊。

六藝いづれか劣ならん、中にもたしなみ持べきは音曲の道なり、今此一冊は、當流の一曲中にも、おもしろきをあつめ、ふし章悉改、あづさにちりばめ、御ひろう申候も、御慰のため歎。

時にはんしやうの難波

大坂心齋橋南へ四丁目

正本屋九左衛門版

◎此書年號ハノセアレドモ寶永享保ノコロノモノナルベシ、元禄十四年ノコト見エタレバサノヨフルキモノニテハナシ、

色里新かれうびん終

大正五年四月二十日印刷  
大正五年四月廿五日發行

(鼠璞十種第一)

非賣品

編輯者 早川純三郎  
東京市京橋區新榮町五丁目三番地  
國書刊行會代表者

發行者 早川純三郎

印刷者 檜山定吉  
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社印刷所  
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 國書刊行會  
東京市京橋區新榮町五丁目三番地

《製複許不》

21 9 21

終

